鉄斎の画業

会　　期

Ⅰ．初・中期　2月14日(火)～3月12日(日)
Ⅱ．後　　期　3月14日(火)～4月9日(日)
Ⅲ．晩　　期　4月11日(火)～5月7日(日)
月曜日休館

鉄　斎　美　術　館

Ⅰ．初・中期

鉄斎は明治維新当時、すでに数え歳で30歳をこえていた。それまでの鉄斎は、幕末動乱の時代に遭遇し、その渦中にあって少なからぬ影響を受けたものの、若い頃からの希望であった儒学者あるいは史・文学者への道をきわめるべく、国・漢学の素養を身につけることに専念したようだ。画道への傾斜については、いつどのような契機で縁が生じたかは判然としないが、大方は当時の文人一般の嗜みとしての書画への好尚が意外に発展したのであろう。現存する作品の早い例としては、世上、当時の著名な女流歌人大田垣蓮月尼の歌に添えて描いた絵が間々現われている。これは鉄斎の画才を逸早く発見した同尼が、その作品の売れることを願った好意から出たこととされているが、結果論的にみれば、鉄斎の場合は特に、個人の資質としかいえない程、その画業の展開は特異で独往的であり、鉄斎の言葉をかりるまでもなく、その画業を通じて師承関係を明らかに示す様式の変遷などは認められない。要は「学士大夫隠者の性情を陶汰する遊戯」なる、文人生活の余技から出発し、その後の学問的な深まりや知識の拡充、そして精神的な高揚が、必要な技術を得て独自の作風を形成したのであって、このあたりに同時代の専門画家と一線を劃する点があり、鉄斎芸術への理解の鍵がかくされているのである。

とはいえ、何事にも将来の飛躍のためには基礎的な習練が重要なことは勿論で、鉄斎の画事の初歩の段階で基本的な手ほどきを施した人として、まず十代の終り頃、漢画系の町絵師大角南耕と窪田雪鷹の名が挙げられ、ついで、南画家小田海仙、大和絵師浮田一蕙などの名が今日伝えられている。特に後二者については、現存の鉄斎作品の初期のものにその筆法が散見されるので、まずは画業のプロローグとしては妥当なように思われる。ついでこの頃には、一般的に中国文人画が尊敬を集め、蒐集する人も多かったことから、特に文人を自任するむきには、この分野の作品を見る機会が多く、ためにそれらの中から多くの示唆を得たことは想像に難くない。事実、やがてそれらの影響下にあると思われる花卉、山水の作が少なからずみられ、鉄斎における初期の作品形成の主流をなすに至っているのである。

しかしながら鉄斎が画技に対して抱いた関心は、そのめざすテーマの多様さと深さの故か、たちまち驚くべき広範囲にひろがり、相異なる技術や様式が目まぐるしく吸収されて多くの作品に創生されていった。曰く大津絵風戯画であり、曰く大和絵様式の鮮麗な画面であり、こういった作風が、伝統的な中国文人画のスタイルを享けた作品と無理なく併存しながら、洗練・充実の度を加え独特の味わいをみせるのであった。

24 淡彩山水図

≪出品目録≫

番号	題名	制作年代	年令	本紙寸法	材質・彩色	形状
1	煎茶図 蓮月尼歌賛	1866（慶応２）	31	119.3×20.5	紙本墨画	掛軸
2	蔬菓図	1866（慶応２）	31	15.8×244.0	紙本墨画	巻子
3	奴図 蓮月尼歌賛	1867（慶応３）	32	113.8×47.0	紙本淡彩	掛軸
4	人勝図 蓮月尼歌賛	1868（慶応４）	33	106.9×35.9	絹本淡彩	掛軸
5	四季山水図	1868（明治１）	33	(各)137.8×62.0	紙本淡彩	二曲屏風
6	家近青山図	1869（明治２）	34	126.8×63.5	紙本墨画	掛軸
7	米點山水図	1869（明治２）	34	173.6×97.5	紙本墨画	掛軸
8	高士烹茶図	1870（明治３）	35	146.5×51.6	絖本淡彩	掛軸
9	蓮月・鉄斎合作扇面画帖	1870（明治３）	35	(各) 18.0×51.0	紙本着色	扇面画帖
10	売飴翁図	1871（明治４）	36	134.3×61.6	紙本淡彩	掛軸
11	紅樣・人物・桂華図	1872（明治５）	37	(各)120.8×33.4	絖本着色	掛軸
12	竹林幽趣図	1874（明治７）	39	133.7×40.0	絹本淡彩	掛軸
13	魁星図	不詳	30代	36.2×52.3	絹本淡彩	掛軸
14	韓信・売餅翁図	不詳	30代	(各)126.1×56.3	紙本淡彩	掛軸
15	太公望図	不詳	30代	131.5×31.0	紙本淡彩	掛軸
16	楠公画像	不詳	30代	124.6×45.9	絖本淡彩	掛軸
17	梅林高士図	不詳	30代	127.0×55.0	紙本淡彩	掛軸
18	幽居細雨図	不詳	30代	123.0×45.0	紙本淡彩	掛軸
19	富士画 東久世通禧賛	不詳	30代	30.4×70.6	絹本墨画・墨書	額装
20	護王和気清麻呂公影	1875（明治８）	40	119.0×49.0	絖本淡彩	掛軸
21	採蘭図	1875（明治８）	40	137.3×61.7	紙本淡彩	掛軸
22	我愛吾廬図	1877（明治10）	42	163.8×52.2	絖本着色	掛軸
23	船上山還幸図	1877（明治10）	42	17.7×118.3	紙本墨画	巻子
24	淡彩山水図	1878（明治11）	43	149.7×68.0	紙本淡彩	掛軸
25	古道照顔色帖	1879（明治12）	44	(各) 23.0×15.3	絖本着色	画帖
26	陶淵明像	1880（明治13）	45	132.1×50.7	絖本淡彩	掛軸
27	渓山無盡図	1881（明治14）	46	14.3×46.6	紙本墨画	扇面額装
28	秋山暮雲図	1882（明治15）	47	129.0×50.0	絹本淡彩	掛軸
29	天鈿女命神影	不詳	40代	126.0×42.8	絹本着色	掛軸
30	休師訪ノ貫図	不詳	40代	136.2×52.3	紙本淡彩	掛軸
31	空翠湿衣図	不詳	40代	144.2×78.5	紙本墨画	掛軸
32	茶事祕録豊公祕話図	不詳	40代	34.1×44.7	絖本着色	掛軸
33	竹林幽栖図	不詳	40代	150.0×51.5	絖本淡彩	掛軸
34	陸羽像	不詳	40代	125.5×28.2	紙本墨画	掛軸
35	耶馬渓図巻	不詳	40代	19.0×336.0	絹本着色	巻子
36	沈石田像	1892（明治25）	57	120.5×41.8	絹本淡彩	掛軸
37	李太白像	1893（明治26）	58	126.0×51.1	絖本淡彩	掛軸
38	英雄肥遯図	不詳	50代	135.2×33.6	紙本淡彩	掛軸
39	孔子像	不詳	50代	117.0×36.5	絹本着色	掛軸
40	田道間守像	不詳	50代	145.5×63.5	紙本淡彩	掛軸
41	楠公忠戦図	不詳	50代	144.2×49.5	絹本着色	掛軸
42	梅山秋葉図	不詳	50代	33.5×125.0	絹本着色	額装
43	砧図	不詳	50代	12.0×38.0	紙本淡彩	扇子

Ⅱ．後　期

古典や先学諸家の画風を吸収し、多彩な展開をみせた初・中期を過ぎると、やがて自己の画風を確立する時代へとはいっていく。それまでのさまざまな意匠はやがて、テーマや表現形式の如何を問わず鉄斎独自の画格と描法に統一されていく。これまでに学び、過眼した先行作品は、現在夥しい数の粉本として遺されているが、それらを渾然自家薬籠中のものとし、加えてかの有名な文人画家の指標たる「万巻の書を読み、万里の路をゆく」を日夜実践し、創作の源泉とした。特に一山一木を写し、自然や造化の妙を手に入れることはきわめて行ない難く、同時に多くの書物に親しむことも相矛盾した命題であったろう。しかしこの哲学を押し通すことができたればこそ、より高い志操を得、悠久の倫理観を感得することも可能であったのである。今にみる当時の鉄斎の作品に、素朴な諧謔や清冽な静けさや端正な美しさといった特質が、一作ごとに替って現われ、やがて高邁な理想に近づくための方法論が、そこに示されているといってよい。

したがってみずからいうところの「画家でない」鉄斎が、かくありたいと願っていた文人生活を十二分に娯しんでいたのもこの当時であろう。当時、といえば時代はほぼ明治の後期であり、すでに鉄斎の画名はとみにあがって同40年には皇室から作品の依頼を受けるまでに至っていた。しかし鉄斎はひたすら文人としての分を守り、やはり「性情を陶汰」するために絵を描いていた。故におよそ美術展覧会なるものに出品して名を競ったり、俗世に何らかの権限を有するというような生き方とは無縁であった。しかし鉄斎画を需める人は多く、地方へも招ばれて大画面の作品を遺したり、格別緊張度の高い細密な色彩画なども描いた。総じて前時代に比して華麗さと大胆さが加わり、画題も豊富で、それぞれの絵に目先の変った意外性が加わってくるのである。その一面、深く沈思したり敬虔な雰囲気を伝える作品もあり、それらがまた一様に鉄斎ならではの画境をそれぞれに拓いているのである。技法的にとりわけ特徴的な点を例示すれば、独特の人物の動きと眼の配りが挙げられ、それは鉄斎画の魅力のうちでも大方がその第一に数えあげる点である。いうまでもなく人物画は中国において最も早く現われ、画法上その人物の活殺はひとえに眼の打ち方にあるといわれてきた。鉄斎がそれを充分に認識していたことは当然であるが、一方では、人物画はその歴史に詳らかでなければ詮ないことと喝破しており、その背景に鉄斎の博学多識ぶりが遺憾なく発揮され、加えて想像力の豊かさが、それらの人物に、いやが上にも生命を与えているといい得るのである。

54 渓山勝概図

≪出品目録≫

番号	題名	制作年代	年令	本紙寸法	材質・彩色	形状
44	碩儒対話図	1896（明治29）	61	138.5×52.0	絹本着色	掛軸
45	漢織呉織二女像	1898（明治31）	63	105.6×33.2	絹本着色	掛軸
46	富士山図	1898（明治31）	63	(各)153.0×352.5	紙本着色	六曲屏風
47	五岳真形図	1903（明治36）	68	31.1×140.8	紙本着色	巻子
48	落車図	1904（明治37）	69	33.5×48.3	紙本墨画	掛軸
49	雲山怡情図	不詳	60代	120.2×51.0	絖本淡彩	掛軸
50	蝦夷遊歴図	不詳	60代	117.4×30.2	紙本淡彩	掛軸
51	蝦蟇鉄拐図	不詳	60代	125.5×50.1	絹本墨画	掛軸
52	看山清福図	不詳	60代	143.8×52.3	紙本墨画	掛軸
53	空谷君子図	不詳	60代	121.2×49.1	絹本着色	掛軸
54	渓山勝概図	不詳	60代	187.2×99.9	紙本墨画	掛軸
55	勾白字詩七絶	不詳	60代	112.0×51.2	絹本着色	掛軸
56	四君子図	不詳	60代	68.5×37.5	絹本着色	掛軸
57	卓筆峰・錦帯橋図	不詳	60代	(各) 22.8×52.5	絖本淡彩	掛軸
58	捕熊図	不詳	60代	(各)133.0×82.0	紙本淡彩・墨画	掛軸
59	幽境無塵図	不詳	60代	130.3×51.3	紙本淡彩	掛軸
60	日光山勝区図	不詳	60代	(各) 17.6×23.4	紙本淡彩	画帖
61	松芝剛勁図	1905（明治38）	70	209.8×71.1	紙本着色	掛軸
62	飲中八僊図	1906（明治39）	71	148.0×53.4	紙本淡彩	掛軸
63	梅澗煮茶・層巒秋霽図	1907（明治40）	72	(各)126.5×42.9	絹本着色	掛軸
64	江山招隠図	1909（明治42）	74	116.6×42.2	絹本着色	掛軸
65	古石長椿図	1912（明治45）	77	150.3×41.7	絹本着色	掛軸
66	武陵桃源図	1912（大正1）	77	130.1×45.0	紙本着色	掛軸
67	擬土佐又平筆法 遊戯人物図	1912（大正1）	77	138.0×51.2	絹本着色	掛軸
68	清渓放舟図	1914（大正3）	79	130.5×33.2	紙本淡彩	掛軸
69	静観楽事帖	1914（大正3）	79	(各) 10.7×25.3	紙本着色	画帖
70	看山自適図	不詳	70代	116.8×42.2	絹本着色	掛軸
71	始献牛乳図	不詳	70代	156.2×50.5	絹本着色	掛軸
72	秋声賦意図	不詳	70代	141.5×69.7	紙本淡彩	掛軸
73	対月鼓琴図	不詳	70代	126.4×42.2	絹本着色	掛軸
74	茂松清泉図	不詳	70代	129.0×60.0	紙本淡彩	掛軸
75	耶馬渓図	不詳	70代	71.3×94.5	紙本淡彩	掛軸
76	落花遊魚図	不詳	70代	134.6×46.5	紙本淡彩	掛軸
77	竪石點頭図	不詳	70代	132.5×33.5	紙本着色	掛軸
78	松藤・桜花図	不詳	70代	(各) 31.0×75.1	絹本着色	額装

Ⅲ．晩　期

人間誰しも、年令が80歳代にさしかかると気力は衰え、老化現象なるものがひたひたと訪れるのが常である。そうでなくても芸術家ならばその仕事に、枯淡、老成なる言葉がふさわしい境地が示される。しかし鉄斎に限っては、そういった評価が全く通用しないのは、古今東西を通じてきわめて稀な現象ではないだろうか。事ほど左様に鉄斎の晩年作は、絢爛と輝き、しかも融通無碍、往くところ可ならざるはない芸術の開花をみたのであった。

大正８年、84歳の鉄斎は帝国美術院会員に任命され、芸術家としての最高の栄誉に輝いた。鉄斎の素志であった「画家にあらず、儒者」という標榜とは些か喰い違うが、社会的には鉄斎は大画家として認められ、作品を希望するむきがますますふえたのも止むを得ないことであった。しかし、儒者としての、或いはひろく学者としての深い造詣や、さらには文人の理想である「脱俗」の精神を盛った鉄斎作品の内容や境地が、はば広い知識層に支持されてきたからだ、と一面の理由を挙げることもできる。ともあれこの晩年に至るや鉄斎作品は質量ともにまたまた飛躍的に変貌増加し、俄然バラエティに富んだ豊かさをもみせ始める。老いてますます壮んというのは言葉の修辞ではなく、鉄斎の場合には作品自体が直接語りかけてくる迫力であり、艶やかさであり、至妙なる醇度のそれといい替えてもよいのであろう。しかもそれらの作品は今日、没後六十有余年を経て猶、ますます広く声価を得つつあるのは、現代の芸術観照のあり方にさえ耐え得るだけの、つまりは直接視覚に訴えるだけの近代的な条件をも有しているからに違いない。たとえば外国人たちが鉄斎をみてたちどころにこれを理解するとは、私たちにはとても思えないが、事実はそうでなく、多くの異国で鉄斎はすでに歓迎され、愛好者もふえていると聞く。そうとすれば鉄斎芸術の持っている本質的なものが、実は日本という狭い範囲を超え、もっと普遍的に通用するものであるのではないかという想いに駆られる。それは東洋精神なり、東洋の絵画手段がいま世界的に関心を寄せられているということと大いに関係もありそうだが、いずれにせよ、墨を主体とし、それに伝統的な東洋の顔料を使ったという画面は実は鉄斎ばかりではないわけで、その点を考えると、やはりこれは鉄斎の精神的領域に問題を帰さざるを得ないだろう。鉄斎の最晩年には僊境図が多くみられるが、このきわめて東洋的な脱俗の境地こそ、今世紀に蔓延した物質的価値の偏重、モノの氾濫する世界に、きわめて示唆的な存在のように思われる。物質に対峙するこの精神こそ、今や世界的な意味で憧憬される概念として把えることができるのではなかろうか。

（村越英明）

104 蓬丘僊境図

≪出品目録≫

番号	題名	制作年代	年令	本紙寸法	材質・彩色	形状
79	東瀛神境図	1915（大正４）	80	150.4×81.4	紙本墨画	掛軸
80	多福多寿多男子図	1916（大正５）	81	17.4×53.1	紙本着色	扇面額装
81	柳陰漁楽図	1918（大正７）	83	141.7×41.8	絹本着色	掛軸
82	孔明躬耕図	1919（大正８）	84	131.4×47.9	紙本淡彩	掛軸
83	四君子絵桐四枚折屏風	1919（大正８）	84	155.8×194.0	桐板着色	四曲屏風
84	乗桴浮海図	1919（大正８）	84	165.4×50.0	絹本着色	掛軸
85	大布放賭図	1919（大正８）	84	136.4×35.3	紙本着色	掛軸
86	茂松清泉図	1919（大正８）	84	153.5×51.1	絹本着色	掛軸
87	読書立志図	1920（大正９）	85	132.0×34.5	紙本淡彩	掛軸
88	労動生活図	1920（大正９）	85	134.5×34.0	紙本淡彩	掛軸
89	笑傲煙霞図	1920（大正９）	85	173.0×46.9	紙本墨画	掛軸
90	陳希夷僊窩図	1920（大正９）	85	131.0×32.5	紙本着色	掛軸
91	桃花図　蓮月尼短冊貼交	1920（大正９）	85	52.0×58.6	紙本淡彩	掛軸
92	空山静境図	1921（大正10）	86	141.2×41.0	絹本着色	掛軸
93	菖蒲節図	1921（大正10）	86	132.5×32.0	紙本着色	掛軸
94	東坡煎茶図	1921（大正10）	86	133.0×32.6	紙本淡彩	掛軸
95	頼氏山紫水明荘図	1921（大正10）	86	28.8×41.7	紙本墨画	掛軸
96	二僊授受図	1921（大正10）	86	151.0×40.4	紙本淡彩	掛軸
97	竹窓聴雨図	1921（大正10）	86	17.6×53.0	紙本淡彩	扇面掛軸
98	仿米・岳峙淵渟図	1921（大正10）	86	（各）25.3×40.1	紙本淡彩	画帖
99	漁父会飲図	1922（大正11）	87	132.6×32.1	紙本着色	掛軸
100	如南山之寿図	1922（大正11）	87	131.3×32.5	紙本墨画	掛軸
101	東坡閑居図	1922（大正11）	87	131.3×31.8	紙本淡彩	掛軸
102	南極仙図	1923（大正12）	88	133.1×32.2	紙本淡彩	掛軸
103	層巒僊閣図	1923（大正12）	88	146.5×40.3	紙本墨画	掛軸
104	蓬丘僊境図	1923（大正12）	88	175.1×48.0	紙本着色	掛軸
105	梅花書屋図	1924（大正13）	89	109.4×39.0	紙本淡彩	掛軸
106	弘法大師在唐遊歴図	1924（大正13）	89	132.9×33.3	紙本淡彩	掛軸
107	葡萄苑図	1924（大正13）	89	132.8×32.1	紙本淡彩	掛軸
108	鉄斎・春子合作帖	1924（大正13）	89	（各）26.0×23.7	紙本淡彩	画帖
109	昇天龍図	1924（大正13）	89(90)	132.2×32.0	紙本墨画	掛軸
110	立身木図	1924（大正13）	89(90)	144.6×39.2	紙本淡彩	掛軸
111	能因法師図	1924（大正13）	89(90)	128.8×38.2	紙本淡彩	掛軸
112	鶯宿梅図	1924（大正13）	89(90)	16.6×53.8	紙本淡彩	扇面額装
113	瓶菊図	1924（大正13）	89(90)	16.6×53.8	紙本着色	扇面額装

≪富岡鉄斎略年譜≫

西暦	年号	年令	事項
1836	天保 7	1	12月19日、京都三条通衣棚、法衣商十一屋伝兵衛富岡維叙の次男として生まれた。母は荻野氏の女絹。兄は敬憲。鉄斎の初めの名は猷輔。
1854	安政 1	19	この前後より絵を学び、窪田雪鷹の絵を臨摸。そのほか大角南耕という画家から絵の手ほどきを受けたとも考えられ、小田海仙、浮田一蕙などをも訪問。
1855	2	20	大田垣蓮月尼の仮寓する心性寺に同居。
1858	5	23	安政の大獄起り、鉄斎の先輩友人の多くが捕えられた。
1860	万延 1	25	道昂の名を用い、鉄斎の号を用いはじめた。
1862	文久 2	27	聖護院村の蓮月尼旧居に私塾を開いたが生活は苦しく、画をかいて生計の助けとした。志士たちと勤王のことをはかった。
1867	慶応 3	32	このころより学者として名を知られる。 2月23日、画家中島華陽の娘、達と結婚。
1868	明治 1	33	このころより百錬の名を用い、また曄(よう)・魯などと称した。
1869	2	34	3月7日、天皇の東行に従う。妻達急逝。立命館の教員になった。
1872	5	37	3月、愛媛県佐々木禎三の三女ハルと結婚。
1873	6	38	6月15日附で湊川神社権禰宜に任命されたが、辞職。
1874	7	39	6月、京都を出発、北海道、東北、関東各地を巡り10月帰京。
1875	8	40	7月、信州、飯田、甲府を経て富士山に登り東京に行く。
1876	9	41	5月、大和石上神社少宮司を拝命。 11月、吉野川上流の南朝古跡をしらべ、紀州本宮、十津川、下市を経て石上に帰った。 12月27日、和泉大鳥神社大宮司を拝命。
1881	14	46	10月、異母兄伝兵衛敬憲歿す。11月7日、辞表提出。
1882	15	47	3月、京都市上京区室町通一条下ル薬屋町の家に移住、これより終生ここに住んだ。この前後数年間鉄崖の落款が多い。
1883	16	48	このころ古大和絵を摸写研究した。
1889	22	54	8月、東海道を経て、鎌倉、宇都宮、日光、足利を巡遊。
1890	23	55	京都美術協会委員となる。 4月、京都を出発、東京、鎌倉、甲府を巡遊して7月帰京。
1891	24	56	京都市日本青年絵画共進会審査顧問。
1892	25	57	3月、京都市美術工芸品展覧会審査顧問、京都美術協会評議員。
1893	26	58	10月、京都美術協会特別会員。
1894	27	59	京都市美術学校教師となる。名古屋、興津方面に旅行。
1897	30	62	11月、日本南画協会発会。商議員となる。
1898	31	63	丹後半島に旅行。
1901	34	66	清水、三保方面に旅行。
1908	41	73	前年天皇より下命を受けた、「安倍仲麿唐明州望月図」「群仙高会図」双幅完成し、6月、宮中に献上した。
1911	44	76	11月、ドイツの美術学者クルト・グラーゼル夫妻来訪。書庫賜楓書楼落成。
1917	大正 6	82	6月11日、帝室技芸員に任命された。 11月15日、京都市公会堂で、栖鳳、景年、芳文、春挙、華香、松園、小坡等と皇后の前で揮毫。
1919	8	84	9月8日、帝国美術院会員を拝命。
1922	11	87	7月、書庫魁星閣落成。この月清澄寺坂本光浄師、土宜高野山管長の紹介で始めて来訪。10月、画室を新築して、無量寿仏堂と命名。
1924	13	89	初秋頃の作品より九十歳の落款を用いた。12月初旬、持病の胆石症発病し、一時快方に向ったが、年末再発し、12月31日午後急逝。

嫡孫 富岡益太郎氏編より抜萃

鉄斎美術館　〒665 宝塚市清荒神清澄寺山内　電話 宝塚(0797)84－9600
平成1年2月3日 印施

≪富岡鉄斎略年譜≫

西暦	年号	年令	事項
1836	天保 7	1	12月19日、京都三条通衣棚、法衣商十一屋伝兵衛富岡維叙の次男として生まれた。母は荻野氏の女絹。兄は敬憲。鉄斎の初めの名は猷輔。
1854	安政 1	19	この前後より絵を学び、窪田雪鷹の絵を臨摸。そのほか大角南耕という画家から絵の手ほどきを受けたとも考えられ、小田海仙、浮田一蕙などをも訪問。
1855	2	20	大田垣蓮月尼の仮寓する心性寺に同居。
1858	5	23	安政の大獄起り、鉄斎の先輩友人の多くが捕えられた。
1860	万延 1	25	道昂の名を用い、鉄斎の号を用いはじめた。
1862	文久 2	27	聖護院村の蓮月尼旧居に私塾を開いたが生活は苦しく、画をかいて生計の助けとした。志士たちと勤王のことをはかった。
1867	慶応 3	32	このころより学者として名を知られる。 2月23日、画家中島華陽の娘、達と結婚。
1868	明治 1	33	このころより百錬の名を用い、また曄（よう）・魯などと称した。
1869	2	34	3月7日、天皇の東行に従う。妻達急逝。立命館の教員になった。
1872	5	37	3月、愛媛県佐々木禎三の三女ハルと結婚。
1873	6	38	6月15日附で湊川神社権禰宜に任命されたが、辞職。
1874	7	39	6月、京都を出発、北海道、東北、関東各地を巡り10月帰京。
1875	8	40	7月、信州、飯田、甲府を経て富士山に登り東京に行く。
1876	9	41	5月、大和石上神社少宮司を拝命。 11月、吉野川上流の南朝古跡をしらべ、紀州本宮、十津川、下市を経て石上に帰った。 12月27日、和泉大鳥神社大宮司を拝命。
1881	14	46	10月、異母兄伝兵衛敬憲歿す。11月7日、辞表提出。
1882	15	47	3月、京都市上京区室町通一条下ル薬屋町の家に移住、これより終生ここに住んだ。この前後数年間鉄崖の落款が多い。
1883	16	48	このころ古大和絵を摸写研究した。
1889	22	54	8月、東海道を経て、鎌倉、宇都宮、日光、足利を巡遊。
1890	23	55	京都美術協会委員となる。 4月、京都を出発、東京、鎌倉、甲府を巡遊して7月帰京。
1891	24	56	京都市日本青年絵画共進会審査顧問。
1892	25	57	3月、京都市美術工芸品展覧会審査顧問、京都美術協会評議員。
1893	26	58	10月、京都美術協会特別会員。
1894	27	59	京都市美術学校教師となる。名古屋、興津方面に旅行。
1897	30	62	11月、日本南画協会発会。商議員となる。
1898	31	63	丹後半島に旅行。
1901	34	66	清水、三保方面に旅行。
1908	41	73	前年天皇より下命を受けた、「安倍仲麿唐明州望月図」「群仙高会図」双幅完成し、6月、宮中に献上した。
1911	44	76	11月、ドイツの美術学者クルト・グラーゼル夫妻来訪。書庫賜楓書楼落成。
1917	大正 6	82	6月11日、帝室技芸員に任命された。 11月15日、京都市公会堂で、栖鳳、景年、芳文、春挙、華香、松園、小坡等と皇后の前で揮毫。
1919	8	84	9月8日、帝国美術院会員を拝命。
1922	11	87	7月、書庫魁星閣落成。この月清澄寺坂本光浄師、土宜高野山管長の紹介で始めて来訪。10月、画室を新築して、無量寿仏堂と命名。
1924	13	89	初秋頃の作品より九十歳の落款を用いた。12月初旬、持病の胆石症発病し、一時快方に向ったが、年末再発し、12月31日午後急逝。

嫡孫 富岡益太郎氏編より抜萃

鉄斎美術館　〒665 宝塚市清荒神清澄寺山内　電話 宝塚(0797)84—9600
平成1年2月3日 印施